OUHS
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES
スポーツ
大体大
第31号
発行責任者
大阪体育大学スポーツ局
局長 宮崎保雄
編集長 相馬空司
編集助手 中村俊志
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話（072）479－3111
FAX（072）453－8972
協力－教育後援会・学友会

NAMISHO GAKUEN 100th Anniversary

We are the Champions, my friends.

歴史塗り替えた！

高松宮記念杯　男子第61回・女子第54回 平成30年度全日本学生ハンドボール選手権大会

大体大史上初のアベック優勝！前人未到の6連覇達成！

高松宮記念杯 男子第61回全日本学生ハンドボール選手権大会
高松宮記念杯 女子第54回全日本学生ハンドボール選手権大会
11月10日～14日
丸善インテックアリーナ大阪他

5連覇中の絶対王者である女子と近年苦しんだ男子がホーム大阪の地で金字塔を打ち立てた。

過去5年間続いている対学生連勝記録更新中で、前人未到の6連覇に王手の掛かった女子と、優勝からは16年遠ざかり過去3年間はベスト4も遠かった男子、対照的な2チームが一丸となって「女子のインカレ6連覇、大体大史上初のアベック優勝」というハンドボール界と大体大の歴史を塗り替えた。更に男女共に個人賞を総ナメにした。

新たな歴史を切り開く

結果を出せれば（今年も女子は強かった）と言うが、日本一までの道のりは、そう単純ではなかった。昨年のチームは王子ノ台のエースが産休期間中で、世界選手権（ロー24）を控えていたことも自信を失くしていたメンバーが多く、世界レベルを感じた日程の連戦を、大きく残していたメンバーに共有することが最大のレベルアップに繋がったのは間違いない。

関西、西日本は個々の能力で危なげない優勝できたが、インカレでは苦戦していた。世界選手権（ロー24）（体育4年）、エースの中山佳穂（同2年）は力を蓄えて、万全の状態で挑む。中山は「勝ち進むことに、1年間チームの課題だったアピランスが既に修正されていき、『よし、今年もいける』という手応えが出てきました」とインカレで更にチームが良くなっていったと考察した。中山の言う通り、チームは「大体大のしごき」と呼ぶ準決勝の東海大戦を通じ、2年ぶりの決勝進出を決めた。

決勝の東京女子体育大戦は1点を争う試合展開となったが、大体大の勢いはまるで、前半15点以降は一度も追いかけることなく、インカレ6連覇を達成し、ハンドボール界の新たな歴史を切り開いた。

彼女たちを強った。

しかし、2回戦、3回戦を勝ち進むにつれて不安は解消されていく。中山は「勝ち進むことに、1年間チームの課題だったアピランスが既に修正されていき『よし、今年もいける』という手応えが出てきました」とインカレで更にチームが良くなっていったと考察した。中山の言う通り、チームは「大体大のしごき」と呼ぶ準決勝の東海大戦を通じ、2年ぶりの決勝進出を決めた。

決勝の東京女子体育大戦は1点を争う試合展開となったが、大体大の勢いはまるで、前半15点以降は一度も追いかけることなく、インカレ6連覇を達成し、ハンドボール界の新たな歴史を切り開いた。

エースとして決めて欲しい場面でシュートを決める左中山貴穂（体育2年）

女子優秀選手賞
相澤菜月（体育2年）
服部沙紀（体育4年）
中山佳穂（体育2年）
星藤菜穂（体育4年）

男子優秀選手賞
原田大夢（体育4年）
阿部成将（体育4年）
堀田陽大（体育2年）

男子特別賞
瀧三千宏（体育3年）

死闘に次ぐ死闘を制す

試合後、正直、優勝を喜ぶ暇もなかった。

日本大阪の前夜、塚平同士郷の田邊拓希（体育4年）のひのから思わず本音が漏れた。今年の男子はベストの舞台であるセンターコートに立った選手が、入もない。経験が無いことは悪い転じることがあるが、今回ばかりは違った。自身初のベスト4進出決めた舘直大夢（同）は「チームの目標は日本一だけだ。4年生みんなが『絶対ベスト4に行こ』という強い気持ちを持って日体大戦に臨んだ」と、日本一の流れを手繰り寄せた日体大戦を振り返った。1回戦の博学戦、2回戦の東天堂大戦ベスト4は勝ち進んだが、どこか発揮出来ない雰囲気が漂い、チームの歯車が噛み合っていなかった。

いや、勢いを増して前半を終えると、後半開始早々、猛攻を掛け逆転に成功。会場は盛り上がり、ここから一気にというタイミングでまさかのクッションが入ってこた。エース橋本駿（体育3年）がレッドカードで退場、会場全体にんよりとした空気が流れたが、橋本がいなくなったことで、チームが「橋本の分も」と奮起。これ先だけ気がすると中川真監督が話しだすように、チームは勢いを増した。そこから一気に試合をひっくり返した大体大は一点を争う死闘を制し、金鹿のセンターコートの切符を手にした。下馬評を覆し、久しぶりのベスト4進出を掴みとった大阪勢は次に、4年生に試合を見せていく過程もにした。下馬評を覆し、久しぶりのベスト4進出を掴みとった大阪勢は次に、4年生に試合を見せていく過程もにした。

ここからは大体大日本一への扉を開くため、夢ノ島第1ブロックの早稲田大戦を、組み合わせ抽選で、ベスト4の中で唯一、「大体大のしごき」を爆発させ、僅差の試合をモノにした。日本大戦を終えた後、阿部成将（体育4年）は二日間、（日体大戦）後は楽にあがれたでした。と華決勝は選手一人一人がキイキとプレーしていた。

迎えた決勝戦は、今年の西日本インカレ2連覇の一戦。試合は福岡大の2連続得点で幕を開けた。大体大も2点差をひっくり返すが、前半終盤に攻守の要である前田が負傷退場し、その直後を許して、大体大の強みである走力を発揮し、ハンドボールの原点である「走り勝つ」を体現した事で、大会の長い歴史でも前代未聞の敵陣を制し、同時に大体大史上初の男子アベック優勝を達成した。

チームの攻撃の要

学生の枠では収まらない 全日本総合3位！

今年のハンドボール部女子は「インカレ6連覇」と「日本選手権ベスト4」の二つの目標を達成する快挙を果たした。日本選手権の1回戦は社会人チームの香川銀行を34－25で破し、続く2回戦は、JHLの強豪、広島メイプルレッズ（当時日本リーグ2位）を相手に前半2点ビハインドをひっくり返し、1点差の激戦を制しての3回戦へと勢い進めの。4年間の最終目標の3回戦、JHLチームの飛騨高山ブラックアルプスを相手に前半からリードし続け、23－19でベスト4入りを果たした。勝ち抜いた強敵の決勝進出をかけた準決勝ファーストラウンドクラマニュファクチャリング戦は惜しくも敗北。3位決定戦に回ったが、驚異の粘りを見せ学生選手権3位に輝いた。翌年1月、男子の日本選手権は橋本駿（行方）が、学生主体の男子は学生にも劣らない、学生チーム唯一の3回戦まで勝ち上がる快挙を見せた。

4年間の溢れる思い出に涙を流しながら賞状を受け取る主将の岸藤菜穂（体育4年）

卒業後に進学するHLでも即戦力の実力を示した原部沙紀（体育4年）

飽くなき向上心が作った驚異の大学生チーム

アテネオリンピックの学生チームが日本選手権でベスト4に入ったことは、衝撃的なニュースとしてスポーツ界を激震させた。例えるならサッカーの天皇杯で、アマチュアの学生集団で、プロチームの中堅2連勝し、準決勝進出する事驚異的な大学生チームだ。

女子の3位を語るには「向上心」という言葉が欠かせない。4年生にとっては最終目標をクリアし、学生ハンドの集大成を大舞台で飾ったと思っていたが、服部沙紀（体育4年）は「ベスト4と同じレベルの出来事である。日本一まで残るとは思っていなかった。世界選手権（ロー24）に出場したことで自信を失くしていたメンバーが多く、試合を重ねるごとにチームは強くなって行くなか、チームがまとまってくるなと思っていた。海外から帰ってきた選手達が、インカレでは苦戦していた。世界選手権（ロー24）（体育4年）、エースの中山佳穂（同2年）は力を蓄えて万全の状態で挑む。中山は「勝ち進むことに、1年間チームの課題だったアピランスが既に修正されていき『よし、今年もいける』という手応えが出てきました」とインカレで更にチームが良くなっていったと考察した。中山の言う通り、チームは「大体大のしごき」と呼ぶ準決勝の東海大戦を通じ、2年ぶりの決勝進出を決めた。

決勝の東京女子体育大戦は1点を争う試合展開となったが、大体大の勢いはまるで、前半15点以降は一度も追いかけることなく、インカレ6連覇を達成し、ハンドボール界の新たな歴史を切り開いた。

JHL チーム相手でも得点が取れる実力を証明した中山佳穂（体育2年）

3回戦まで勝ち上がる大健闘を見せた男子ハンド部

女子2018年12月19日～23日／守口市民体育館他　男子2019年1月29日～2月3日／山鹿市総合体育館他

男子サッカー

最強世代インカレ3位で引退

平成30年度 第67回全日本大学サッカー選手権大会

12月12日～24日 NACK5スタジアム大宮他

関西選手権準優勝、総理大臣杯準優勝、関西リーグ優勝と全大会で決勝進出を果たし、好成績を納めてきたサッカー部男子。残るインカレ優勝を勝ちとれば、名実ともに大体大の歴史上最強チームにふさわしいチームになれる状況だったが、惜しくも準決勝で駒澤大に敗れ、3位でインカレの幕を閉じた。

全国の壁

今年のサッカー部男子は各大会の成績だけを見れば、褒められるべき戦いをしているのがわかるが、全国ではあと一つのところでタイトルを取りこぼしていた。松尾元太監督就任後、各大会で準優勝が多くサッカーメディアからもシルバーコレクターと不名誉な万年2位の印象を持たれていたが、実力は間違いない。プロ入りする4年生も多く、スター揃いのメンバー構成。そんな最強メンバーが最後の年を迎えたシーズンは好調な滑り出しで、誰しもが総理大臣杯、インカレの2冠に期待を抱いた。

しかし、関西では圧倒的強さでリーグ優勝したが、全国ではあと一歩が届かなかった。それでもシーズンを通して、各大会で好成績を残し続けたことは今年の大学サッカーNO・1のチームといっても過言ではない。

フリーキックで相談する
堀内颯人（体育４年）と浅野雄也（体育４年）

圧倒的なスピードで駒澤大ディフェンスを翻弄した
浅野雄也（体育４年）

ゴール前で存在感を
示すエース林大地
（体育３年）

スター軍団の引退

今年はスターティングメンバーのほとんどが4年生で、プロ入り内定者が4人もいるスター軍団だったが、インカレを最後に引退する。下級生の頃から試合に出続けていた4年生の引退は、チーム力を大幅にダウンさせると思われたが、心配よりも期待の方が大きく上回った。関西得点王に輝いたエースの林大地（体育3年）、大学生の日本代表に選ばれた田中駿太（同3年）を始め、成長著しく将来が楽しみな下級生が多く存在している。

そう思わせてくれたのはインカレで試合に出場し、駒澤大戦ではスーパーボレーで得点を記録した林尚輝（同2年）。林は「得点はうれしかったけど、チームが負けたので意味がない。チームを勝利に導ける選手にならないといけない」とレベルの高い4年生と同じ意識・考え方をすでに持っていた。さらに新4年生には一番下のチームから這い上がり、今ではスターティングメンバーに名前を連ねる雑草魂を持つ西田恵（同3年）もいる。4月から入学してくる新入生とスター軍団と肩を並べたメンバーで作っていく新たなチームに期待したい。

ゴールとなった
シュートを打つ
林尚輝（体育２年）

ゴールに喜ぶ選手たち

空中戦で競り勝つ菊池流帆
（体育４年）

怪我を抱えながらも後半に出場し
存在感を見せた末吉塁（体育４年）

表彰式の記念写真

３位のトロフィーを受け取る
ゲームキャプテンの立川小太郎
（体育４年）

準決勝駒澤大戦のスターティングメンバー

試合に挑むスタッフとベンチメンバー

2018年度 第42回 総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント

名誉ある準優勝
2018年8月31日～9月9日、キンチョウスタジアム他

関西第2代表で、2回戦から出場した総理大臣杯。初戦は昨年のインカレで苦い思いをさせられた因縁の福岡大と対戦し、見事リベンジを果たした。勢いづいた大体大は、続く3回戦の駒澤大、準決勝の中京大の試合を僅差でモノにし、決勝進出。大勢の観客が見守る中行われた決勝戦は、3年連続ファイナリストで関東屈指の強豪明治大と対戦した。0－2で惜しくも敗れたが、堂々の準優勝に輝いた。

賞を受ける菊池流帆（体育４年）

表彰状を受け取るゲームキャプテンの立川小太郎（体育４年）

表彰される大体大イレブン

攻撃の起点となった堀内颯人
（体育４年）

決勝に挑んだスターティングメンバー

見せつけた底力

「完敗です。このゲームに関してはこの一言に尽きます」と決勝戦後に語った菊池流帆（体育4年）。大体大は明治大の思い描いていた展開通りのサッカーをやられてしまった。決勝戦だけを見れば「らしくないサッカー」をしていたが、大会を通して粘り勝つことができており、強さの底力を見せた。1－0で勝利をあげた福岡大戦を始め、力の拮抗した試合でも最後に勝ち切り「大体大らしいサッカー」ができた大会と言えるだろう。

負けて学んだ勝利への鍵

完敗を喫した明治大戦だが、負けて学んだことは多くあった。松尾監督は「日本一を獲るには、自分も選手もまだまだ足りない。成長しなくてはならないと気付かされた大会になった」と大会全体を振り返ったように、シーズン前半を締めくくる試合としては大きな収穫を得た。

大体大は前半から積極的にボールを保持できており、何度もゴール前までいく形もできていた。選手たちが「完敗だった」と口にするほど圧倒的な力の差があるわけではない。勝敗を分けた唯一の部分は決定力の差だろう。サッカーはシュートを決めなければ勝つことはできないスポーツ。課題を克服し、もう一度日本一に輝く姿に期待がかかる。

サイドから攻め続けた
西田恵（体育３年）

身体能力を
活かしたプレーで
明治大ゴールを
脅かした
古城優
（体育４年）

松尾元太監督は「サッカーだけではなく、勉強を始め普段の学生生活から」と口を酸っぱくして選手に言い続けている。その結果が地元大阪開催で多くの方々が応援に駆け付けたくなるチームになり、チーム大体大で戦う底力を発揮させる要因となっただろう。

女子サッカー

意地の体大対決！インカレベスト16

第27回全日本大学女子サッカー選手権大会

2018年12月23日～2019年1月20日 三木総合防災公園 第2陸上競技場他

昨年はトーナメントの山場である日体大との体大対決を制し、一気にインカレ3位まで上り詰めた大体大。今年は1回戦の徳島文理大に4－0で勝利を収めたが、2回戦で今年インカレを制した日体大と再戦し、惜しくも0－2で大会に幕を降ろすこととなった。

武器であるスピードを活かし
何度も日体大ゴールに迫った井之脇朱音（体育３年）

プレーと精神面で
チームを牽引した
主将の田中楓子
（体育４年）

試合は誰が見ても大体大が劣勢を強いられていたが、ピッチ上の選手をはじめ応援団からは苦しい顔は見られなかった。前半から攻め込まれはしていたが、失点をせず食らいつき何度か相手ゴールに迫るチャンスも見せていた。前半44分、なんとか猛攻をしのぎ切ったと思って安心した隙を突かれ失点。後半攻勢に出ようとFW井之脇朱音（体育3年）とFW春日愛（同3年）が交代したが、開始早々まさかの追加点を許してしまう。0－2となり苦しい状況でも応援団は真冬に汗をかきながら笑顔で声援を送り続け、選手たちは応えるように気迫のこもったプレーを見せ続けた。

苦しくも笑顔で

養われる人間性

いかなる時も下を向かず前を向き、一人一人が戦う姿勢を保ち続ける人間性は石居宜子監督の指導方法にあった。「ノリさん（石居監督）は、競技の前に一人の大人として、学生ではあるが社会人としての行動の在り方を重んじている」と主将の田中楓子（体育4年）が教えてくれた部内の教訓が大きく影響しているのは間違いない。当たり前だが、挨拶や礼儀はしっかりと培われている。日々の活動で養われている人間性があるからこそ、全国でも結果を残し、関西屈指の強豪校であり続けることができているのだろう。

サイドからのドリブル突破で
日体ゴールを脅かした
持田なな（体育４年）

攻守の両面で圧倒的存在
感を出していた鈴木千尋
（体育３年）

スターティングメンバー

女子バスケットボール

涙のベスト16！来季へ期待！

第70回全日本大学バスケットボール選手権記念大会

2018年12月10日～15日　大田区総合体育館他

昨年ベスト8に入ったインカレだが、今年はメンバーが大幅に変わったチームで、苦しみながらもインカレ出場を決めたチームが全国の壁に立ち向かった。1回戦は1点差を争う試合を制し勝ち上がった。続く2回戦、関東8位の桐蔭横浜大を相手に前半から接戦を繰り広げたが、波に乗り切れず惜しくもベスト16で敗退となった

スタメンに抜擢されたルーキー新谷莉歩（体育1年）

1回戦で決勝点を決めたルーキー奥村鈴（体育1年）

劇的勝利の1回戦

1回戦は大体大が劇的な勝利を収めた。観客側からすると見ていて楽しい試合だったが、チームには心臓に悪い壮絶な試合。第1Qは1点を争う展開となり、18―20と大体大が2点ビハインドで終える。第2Qはお互い攻め手を欠き、13―13とロースコア。試合が動いたのは後半戦開始の第3Q、ルーキー奥村鈴（体育1年）のシュートが決まりだし、21―17と流れを掴んだ大体大がリードを奪う

交代メンバーとしてしっかり役割を果たした尾崎夏希（体育4年）

リバウンド、オフェンスと大活躍の中村有希（体育2年）

出番に結果で答えた新田桃子（体育3年）

アクシデントと下級生の成長

劇的勝利を収めた大体大は勢いに乗るかと思われたが、2回戦で思わぬ展開が待っていた。桐蔭横浜大との2回戦、試合中盤で主将の灘本夏綺（体育4年）が負傷退場を余儀なくされる時間があった。チームがこれからという流れに乗った瞬間だけに大きな痛手となったが、コートに残ったメンバーは健闘を見せる。特に良かったのは奥村と新谷莉歩（体育1年）のルーキーコンビ。二人は試合後のインタビューで「チームの勝利に貢献できなかった」と悔しさを覗かせ、来シーズンに向けて活躍を誓った。灘本も「悔しいですけど、学生バスケに悔いはないです。後輩たちがリベンジしてくれることを期待しています」と4年間を振り返り、後輩にエールを送った。

最後まで大体大のゴール下を守り続けた前田明日華（体育4年）

途中で無念の負傷退場も気合を見せた灘本夏綺（体育4年

5年ぶり23回目の関西優勝！

2018年9月1日～11月4日／東和薬品RACTABドーム他

平成30年度関西女子学生バスケットボールリーグ戦

関西No・1の座をかけたリーグ最終節は宿命のライバル、人科大と対戦した。昨年はこの最終節で敗れ、さらに今年は春の全関西で1敗していただけにリベンジに燃える思いは熱かった。試合は大体大が見事76―61と点差をあけてリベンジに成功し、5年ぶり23回目のリーグ制覇を成し遂げた。

個人賞では主将の灘本夏綺（体育4年）が最優秀選手賞、奥村鈴（同1年）は新人賞と優秀選手賞の二つのタイトル、中山有希（同2年）が優秀選手賞を獲得した。

〝宿敵〟人科大戦

宿敵相手に久しぶりの快勝は、1試合28得点の灘本抜きには語れないだろう。試合は前半から壮絶な点の取り合いが繰り広げられた。第1Q、人科大の外角のシュートが面白いように決まり、23―26と僅かにリードを許してしまう。第2Q、大体大は灘本の3ポイントシュートで逆転に成功すると、グングンと点差をつけて44―33で前半を折り返した。流れに乗ると灘本のシュートが面白いほどに入り、ディフェンスもうまく回り始め、人科大にはタフショットしか打たせない気迫あるディフェンスで完全に試合の主導権を握った。更に追い討ちをかけるように中村のバスケットカウントなどが出始め、最終スコアは76―61で快勝を収めた。

28得点大暴れで優勝に導いた主将の灘本夏綺（体育4年）は全ての面でチームを引っ張った

負けて学んだリーグ戦

最高の勝利で終わったリーグ戦だが、道のりは険しかった。リーグ戦後期でまさかの2敗を喫しており、チーム状態は良くはなかった。灘本は「意見を言い合ったり、うまくチームで話し合いができていなかった」と当時の不調の原因を明かした。続けて「それでもあの時の敗戦が、チームが変わるきっかけになったのは間違いないです」と敗戦から学んだことを感じていた。何が変わったのかは試合を見ていてすぐにわかった。チームで意思統一された戦術で、気持ちが吹っ切れたプレーをしていた。後輩たちに良いお手本となっており、来年の2連覇に期待したい。

ゴール下で体を張り続けた前田明日華（体育4年）

2年目でチームの中心人物となった中村有希（体育2年）

精神面、ディフェンスでチームを牽引した副主将の大石萌夏（体育4年）

果敢に攻め、人科大を翻弄した辻川光希（体育4年）

リーグ戦を通して存在感を示したルーキー奥村鈴（体育1年）

急成長著しいルーキー新谷莉歩（体育1年）

男子バスケットボール

2018年度 関西学生バスケットボール 新人戦

ルーキー達が魅せた！新人戦準優勝！

2018年11月17日～11月24日　近畿大学記念会館他

昨年、リーグ制覇をした京産大を抑えて優勝を果たした新人戦。今年の決勝も同一カードの対戦となった。大体大は今年、エース山田友哉（体育3年）がシーズン途中で負傷欠場するなどの影響でインカレ出場も逃してしまい、苦しんだ1年だった。しかし、最後を締めくくる新人戦では昨年のMVP、今年の敢闘賞に輝いた藤本巧太（同2年）を始め、順当に決勝まで勝ち上がった。惜しくも京産大にリベンジはされたが、シーズン最後の大会で準優勝に輝いた。個人賞には原勇気（同1年）が3ポイント王に輝いた。

期待の大型ルーキーコンビの一人、中原啓太（体育1年）

期待の大型ルーキーコンビの一人、アデバンジョウィリアム（体育1年）

2年連続決勝同一カード

決勝の対戦相手となった京産大は今季、大型ルーキーとして身長2㍍超えの留学生、全国でも名の通った選手が入り優勝候補No・1と言っても過言でなかった。試合は思わぬ展開となった。第1Q、開始早々、京産大の猛攻に大体大が手も足も出ず、試合開始5分ほどで比嘉靖監督が珍しくタイムアウトを取るほど勢いに押され、6―35の大差をつけられてしまった。なんとか立て直しを試みるも、勢いは凄まじく前半を27―52で折り返す。

このまま行ってしまうのかと思われたが、オールメンバーチェンジで代わって入ったスタメン以外の選手が、起用のチャンスを掴み京産大の勢いを沈めた。しかし、前半に開いてしまった大量の点差を埋めきることができず、72―87で準優勝となった。

交代出場ながら京産大を振り回した高橋主（体育2年）

勝てるチームになるために

試合後、比嘉監督は「甘い。決勝までは良かったのは事実だけど、強い相手を前にして今日の準備の仕方を見ていると、日頃の練習を含めて一つ一つの行動が甘い」と前半の不甲斐ない結果となってしまった選手たちに喝を入れた。チームの主将となった藤本も「まだまだだなと感じさせられた」と反省しており、次の勝利に向けて経験を活かそうとしていた。

決勝では反省点も多かったが、控えのメンバーもやれるということがわかり、ますますバスケットボール部男子の活躍に期待がかかる。

エースでチームの大黒柱、敢闘賞を受賞した藤本巧太（体育2年）

2年生としてチームを牽引した池田楓（体育2年）

3ポイント王を獲得した原勇気（体育1年）

最後の年に大暴れ！全日本2位！

陸上競技

第102回日本陸上競技選手権大会　天皇賜盃第87回日本学生陸上競技対校選手権

2018年6月22日～24日、9月6日～9日
維新百年記念公園陸上競技場、等々力陸上競技場

全カテゴリーの陸上競技選手の日本一を決める日本選手権に大体大から2選手が表彰台に上る快挙を演じた。投擲部門の男子やり投げに出場した坂本達也（体育4年）が最後の6投目で自己ベスト更新となる77m33で2位、中西啄真（M2）が76メートル16で3位に輝いた。他にも投擲を中心に、国内最高レベルの大会に全員で10人の学生が出場した。

学生最後の大舞台で先輩に勝利した坂本達也（体育４年）

長年先輩として後輩に勝ち続けた中西琢真（M2）

インカレ3位

坂本は今年のインカレでも3位に輝く好成績を収めている。昨年までは、実力は折り紙付きだが、中西と石坂力成（体育3）の次に強い選手という印象が強かった。学部生最後の年である4年生として挑んだ今シーズン。調子も良く、ピークへの持っていき方も完璧に近かった。

序盤の織田記念で71メートルを投げ9位に輝くと、関西インカレでは悪天候の中70メートルを投げ2位に輝いた。そこからどんどんと調子を上げていき、日本選手権でついに自己ベストを超える77メートル33のビッグスローを見せた。更にここで終わらなかったのが今年の坂本の凄いところ。インカレでも73メートル69を投げ、3位を勝ち取ることに成功した。

目指すは東京オリンピック

坂本の成長記録をたどると面白い結果が見えてきた。2年生の時までは自己ベストは68メートルと約10メートル低かったが、3年生になってから記録が伸び始めた。坂本は「キッカケは栗山佳也監督の指導」だと振り返った。「やり投げの勉強を真剣にし始めた時に栗山先生から『助走スピードをあえて落としてみてはどうか』と言われて、やってみたらドン記録が伸びていった」とまさに天の一声が変えた。坂本曰く「理論上は助走スピードを速くして、槍に力を伝えることで遠くに飛ばすことができる」と言っていたが、不思議なことに真逆のことをして記録が伸びている。

まさにここが次なるステージへのポイント。坂本は「今は自分のMAXのスピードに対して筋力がついてきてないのと、体の使い方の部分で正確性に欠けているのでスピードを上げられない。記録を伸ばすにはスピードを上げても崩れない技術と体が必要」と課題点を語った。やり投げ人生はまだ終わらない。坂本は大学院に進み、もう2年やり投げの動作に関する研究をしながら、競技者としての人生を続ける。「目標は2020年の東京オリンピックに出場すること。そのためには83メートル（世界陸上の標準記録）を越えていきたい」と大きな夢に向かって突き進む決意を明かした。

しのぎを削りあったやり投げ三銃士

日本選手権で２位に輝いた坂本達也（体育４年）と中西琢真（M2）

日本選手権２位インカレ３位に輝いた坂本達也（体育４年）

ラグビー

ヘラクレス軍団復活へ

第1章

2018ムロオ関西大学ラグビーAリーグ
2018年9月24日～11月25日／鶴見緑地公園球技場他

昨年悲願のAリーグ復帰を果たしたヘラクレス軍団。今年から関西、全国でも優勝争いをするほど強かったラグビー部復活への長い戦いが始まった。リーグ序盤は全く勝てずに苦しんだが、今年の関西リーグ戦でパーフェクトゲームを連発し、全国準優勝に輝いた天理大学に一矢報いた試合から大体大は変わった。結果的には、Aリーグ7位で入れ替え戦で勝って残留となったが、爪痕を大きく残した復活初年度となった。

攻撃、守備の両方でチームの要となる主将の高未来（体育４年）

トップリーグのヤマハ発動機に内定していてる高橋在人（体育４年）

圧倒的フィジカルで突破しまくる小谷中（体育４年）

積極的な攻撃、守備でチームを支え続けた本庄拓真（体育４年）

最低限のノルマクリア

今年のチームとしての最低限のノルマは「Aリーグ残留」である。決して低い目標ではなく、実力と現状の関西のレベルを見ての判断をしているのだろう。復活初年度で大きく相手と差を広げていくのは難しい。Aリーグを初めて経験する選手しかおらず、全ての部分においてBリーグとはけた違いのプレッシャーのかかる試合が毎節行われる。選手間での不安は拭えないのは仕方ない。序盤勝てなかったのは、精神面での不安が顕著に現れていた。

しかし、第4節の天理大戦をきっかけにチームは変わり、第5節の関西大戦では復活して初めての白星を挙げることに成功した。そこから選手たちの表情には自信が見え始め、勝利とはならなかったが、同志社大を後一歩のところまで追い詰め、強さを見せた。

頂点への5カ年計画

今年のノルマは達成したが、見据える先はもっと高く険しい場所である。関西で頂点に立つまでをラグビー部の中で、Aリーグ復活してから5年で辿り着くことを計画している。ゆっくり地盤を固めながら、選手の入れ替わりの激しい学生スポーツで勝ち続けるため、本当の意味での常勝ヘラクレス軍団を築き上げるには時間がかかるのは仕方がないこと。

しかし、行ってきていることには間違いはなく、選手たちも実感している。今年卒業し、トップリーグ内定（ヤマハ発動機）が決まっている高橋在人（体育4年）は「正直、勝てていないので説得力がないかもしれないですけど。初勝利を挙げてから『いける』という確信というか気持ちの変化はあった」と手応えがあったことを明かした。来年も大学ラグビーの舞台で戦う中島悠太（同3年）は「自信はある。あとは勝って証明していきたい」と来季の勝利を誓った。

新年度のキーマン、主将となる山下真之介（体育３年）

果敢に攻める本庄拓真（体育４年）

体操競技

男子団体優勝！悲願の1部復帰！
女子団体8位入賞の快挙

第72回全日本学生体操競技選手権大会
2018年8月10日～12日／ベイコム総合体育館他

昨年、1部復帰を果たし、今年は1部8位以上を目指す女子団体と、今年こそ1部復帰を目指す男子団体はともに目標を達成した。女子団体はなんとかけがからの復帰が間に合った竹谷清花（体育3年）が加わり、ベストメンバーで大会に挑み、7位の順天堂大に僅か0・250ポイント差まで迫る演技を見せた。男子団体は若きエース加藤大貴（同2年）を中心に1組だけ390点台を出し、圧倒的強さで2部優勝を果たした。

また、個人総合では加藤が4位、上田颯（同2年）が7位入賞を果たした。

渾身のカッシーナ

主将の鈴木秀（同4年）の鉄棒で見せたカッシーナ（G難度の大技）は、男子団体の2部優勝、1部復帰を決定づけたと言ってもいい。男子団体の優勝までの道のりは険しすぎた。

インカレ直前の出来事だった。いつも指導にあたってくれた小林コーチが亡くなった。練習現場は変化し、選手たちは頼りにしていた人がいなくなり、大きな不安が襲った。

しかし、藤原敏行監督を始め、チーム一丸となりなんとかインカレを迎えた。「小林コーチのためにも絶対に優勝する」と言わんばかりの気迫あふれる演技を見せる団体メンバー。中でも一際観客を沸かせたシーンがあった。鉄棒の演技、「カッシーナだけはこだわってやってきた。この大舞台で成功して本当にうれしい」と鈴木が話したように、何度失敗しても入学時からこだわり続けたカッシーナを成功させた。チームは鈴木の演技に感化されるように最高の演技を見せ、見事優勝を果たした。

渾身のカッシーナを決めた瞬間の鈴木秀（体育4年）

進化し続ける女子団体

昨年、1部復帰を果たしたものの、下馬評では入れ替え当落線上にいると判断されていた女子団体。けがからの復帰や、けがを抱えながら演技する選手など不安要素を抱えながらでも、周りの評価を覆す活躍を見せた。復帰1年目で8位入賞し、1部で渡り合っているのには高いチーム力が大きく関わっている。女子団体は田原宏晃監督を中心にチームワークが群を抜いて良い。演技中も笑顔が溢れ、ミスをしてもカバーし合う。

試合後、竹内友美（体育4年）は「今日はチームで支え合いながら、今できる最高の演技が出来た。一緒に出場した下級生には本当に感謝です」と他のメンバーへの感謝を述べた。かかわってくださる方々への感謝の気持ちを忘れない人間性が、更に女子団体を強くし続ける。

怪我から復活し、チームを好成績に導いたエース竹谷清花（体育3年）

1年生ながらメンバー内で上位の成績を出した常國萌々子（体育1年）

団体メンバー唯一の4年生でチームを牽引した竹内友美（体育4年）

得意の跳馬で高得点を出した赤塚晴菜（体育2年）

粘りの演技で8位に繋げた小林千鶴（体育3年）

2年生ながら安定感のある演技で個人総合7位になった上田颯（体育2年）

安定の演技でチームを勝利に導いた佐敷亮仁（体育3年）

並み居る強豪選手を抑えて個人総合でも4位に輝いた加藤大貴（体育2年）

得意の平行棒で高得点を叩き出した高島康平（体育3年）

柔道女子

第30回関西学生柔道体重別選手権大会
2018年9月2日／天理大学 杣之内第一体育館他

関西2連覇！
次に狙うは全国の頂点

昨年の王者として挑んだ今大会。インカレで全国、日本トップレベルの選手と戦い、経験値を詰んだ東加珠（体育2年）は圧倒的強さで見事大会2連覇に輝いた。他にも辻彩果（同1年）と河野夏実（同3年）が3位に入り、辻は全日本学生体重別選手権大会の出場権を獲得した。

2人目のミライモンスター

近年、大体大の柔道部女子出身選手といえば、学生の時から日本トップレベルで活躍し、現在は世界を舞台に勝負している2017年卒の山本沙羅選手（現ミキハウス）が象徴的である。彼女が一躍、社会的、大学内でも知名度が上がることになったのは、『ミライモンスター』というメジャーなテレビ番組に取り上げられたことがキッカケである。

将来性豊かな選手の普段の生活などを追い、メディアを通していろんな人たちに選手の魅力を発信していく番組構成になっており、大体大女子柔道部の名前も社会的に大きく広まった。まだ2年生ながら2連覇を達成した東は、ミライモンスターと肩を並べる逸材として注目を集めている。

関西学生体重別2年連続優勝の東加珠（体育2年）

少しずつ近づく全国レベル

今年の柔道部女子の大きな出来事はインカレに出場し、日本・大学全国トップレベルの山梨学院大と対戦できたことである。強くなるためにはまずは強いチームを知らなければならない。インカレを終えた試合後に東は「悔しいけど、相手との差を感じた」と語っており、現状インカレ優勝は先の話なのかもしれない。しかし「関西では通用していたことも、日本のトップレベルでは通用する部分としない部分がわかったので日頃の稽古で技を磨いていきたい」とも。近い将来にはインカレ優勝を果たす姿が見られるかもしれない。

第27回全日本学生柔道優勝大会で5連覇の山梨学院大の選手と善戦した東加珠（体育2年）

日本拳法

角野、悲願の日本一！

第34回全日本学生拳法個人選手権大会

2018年10月21日／名古屋市露橋スポーツセンター他

毎年、あと一歩のところで敗れ、2年連続個人インカレ3位になっていた角野晃平（体育3年）が高校生から始めた日本拳法で初めての快挙を成し遂げた。個人インカレの準決勝までは危なげなく勝ち進んだ角野。決勝進出へ、迎えた関大のエース上垣内との対戦で序盤に先に一本取られたが、見事逆転勝利で決勝進出を決めた。逆転勝利の勢いそのままに決勝戦でライバルを相手に完ぺきな分析で立てた対策を実行し、ストレート勝ちで日本一に輝いた。

3度目の正直

角野はこの大会で2年連続3位と悔し涙を呑んでいた。「3度目の正直」と今年にかける思いは強く、練習内容の改善と学外での練習を増やし、例年に比べて練習量を大幅にアップした。練習は嘘をつかなかった。「やっと練習の成果が実ってとても嬉しい」と角野は気合いの入った1年間の思いを噛み締めながら胸をなでおろした。プレッシャーのかかる中でも、やれることはやってきたという自信からか、決勝を迎えても「全力でぶつかるしかないと思い緊張はしなかった」と試合を楽しんでいた。

新年度は日本拳法部の主将になる角野。「チームを束ねて団体戦でもタイトルを狙いつつ、自身もインカレ二連覇を達成するのが目標です」とさらなる飛躍を誓う。更に「まだマイナーな日本拳法が大阪体育大学の看板になれるように精進していきます」と力強く大きな目標を語ってくれた。大きな目標には今年よりも更にハードな毎日が待っているかもしれない。それでも角野は「今年は優勝もでき、支えてくれた周りの方々に感謝の気持ちを忘れず、何事も諦めなければ道は開くと信じ、来年も頑張ります」と笑顔と自信満々の表情で決意をあらわにした。

目指すは連覇と団体での結果

なぎなた

仕入・福岡コンビがインカレ2年連続優勝！

第57回全日本学生なぎなた選手権大会

2018年8月12日／入間市市民体育館他

演技の部2連覇をかけて挑んだ福岡歩（体育3年）・仕入愛梨（同4年）ペアは見事圧倒的な力の差を見せて2連覇を達成した。更にリベンジをかけた団体・個人試合競技の部では、団体戦は初戦敗退となってしまったが、仕入が準優勝に輝いた。

インカレ２連覇コンビ

神ってるコンビ

仕入・福岡ペアを名付けるなら少し前に流行った「神ってる」コンビがしっくりくる。演技の部で2連覇を達成したが、ただ連覇をしたわけではない。2回とも圧倒的点差をつけて優勝している。「一番は自分に厳しくというモットーで毎日過ごしたこと」と仕入は一番の要因を明かした。なんと毎日の行動として、家族LINEに「インカレで優勝する」という決意の言葉を述べて、毎日自分自身にプレッシャーを掛けていた。ここまでするとプレッシャーを抱えこんでしまって自滅してしまうのではないかと心配になるが、仕入は「ペアの福岡が落ち着いて声をかけてくれ、監督として隣に座っていた3年生のサポートのおかげで何とか頑張れた」とチームの絆でプレッシャーを乗り切った。

なぎなた部は部員が少なすぎて、部の存続までもが危うかった時があったが、仕入が少ない部員が離れていかないように一生懸命働きかけをして存続させてきた。同期は一人もおらず、伝統ある部活がなくなりそうになっていた状況だった。「今までで一番辛かった。何度も逃げ出したくなった。高校までの何事もない当たり前の日々の幸せを実感した」と仕入はそんな状況だった当時の思いを明かした。

辛さの先には最高の経験があった。「辛かった時期は自分を成長させてくれた。最高の仲間ができて、最高に楽しい幸せな四年間だった。人としても人生の中で一番成長した四年間だった」と部の存続を救った功労者は辛い出来事にも感謝し、大体大を巣立っていく。

部の危機を支え続けた功労者

ダンス

審査員賞 北日本新聞社賞受賞！

第31回 全日本高校・大学ダンスフェスティバル神戸

2018年8月7～10日／神戸文化ホール

第21回アーティスティックムーブメントinTOYAMA

2018年9月16～17日／富山県高岡市ふくおか総合文化センター

ダンス部は、毎年出場する大会すべてで賞を取り続けており、今年も最高峰の大会で受賞した。NHKの放送もある全日本高校・大学ダンスフェスティバルでは、審査員賞を受賞。また、アーティスティックムーブメントでは2年生が考えた「カブリ」という演技が北日本新聞社賞を獲得し、選ばれたチームのみが参加できる高円寺コスモシアターダンスフェスティバルに出場した。

採点競技ゆえの難しさ

表現スポーツは採点方式ゆえに結果を出し続けることが難しい。試合ごとに採点基準はあるが、審査する人の感覚に大きく左右される。近年AIなどによる人工的な動きの検出が可能になり、よりスポーツ化してきているが、ダンスで言えば毎回新しさなどを求められることから、どんなに技術的に凄いダンスをしても高い得点が出るとは限らない。そんな中、ダンス部は結果を出し続けることができている。

その答えは単純かもしれない。大会に向けて毎回のダンスのテーマ、構成、振りなどを学生が決め、更に各チームに分かれて行なっている。流行などに敏感な学生が主体となって考えることで、新しさや奇抜な表現が現れるのかもしれない。だからこそ、大体大のダンス部は常に賞を取り続け、華やかな舞台で結果を出し続けることができているのかもしれない。

【各種競技記録】

（順不同）

アメリカンフットボール部

◆2018関西学生アメリカンフットボールリーグDiv・3D（8月24日～12月15日、EXPO FLASHFIELD）

▽第1節　大体大 63―8 佛教大
▽第2節　大体大 14―13 大院大
▽第3節　大体大 7―2 大市大
▽第4節　大体大 30―14 兵庫県立大
▽Div・3順位決定戦（1回戦）　大体大 17―3 兵庫県立大
▽Div・3順位決定戦（1位決定戦）　大体大 7―14 大教大
▽入れ替え戦（Div・2―3）　大体大 6―3 和歌山大
リーグ戦MVP＝土井 聡馬（体育4年）
Div・2昇格！

バドミントン

◆第58回西日本学生バドミントン選手権大会（9月2日～10日、岡山市総合体育館他）

【女子】
▽1回戦　大体大 3―1 名古屋女子大
▽2回戦　大体大 1―3 松山大

【男子】
▽1回戦　大体大 3―0 九州共立大
▽2回戦　大体大 3―1 神戸学院大
▽3回戦　大体大 0―3 関西学院大

◆平成30年度関西学生バドミントン連盟秋季リーグ（9月12日～9月29日、大津市皇子が丘公園体育館他）

【男子】
▽第1節　大体大 3―2 神戸学院大
▽第2節　大体大 5―0 大阪大
▽第3節

男女ともインカレ出場!

バレーボール

第71回 秩父宮賜杯全日本バレーボール大学男子選手権大会
第65回 秩父宮妃賜杯全日本バレーボール大学女子選手権大会

2018年11月26日～12月2日
大田区総合体育館他

男女ともに今年の春季リーグで上位に入り、西日本インカレでも好成績を残した。インカレ出場権を獲得し、臨んだ秋季リーグは好成績とまではいかなかったが、関西1部で中堅の位置をキープ。迎えたインカレは男子が初戦を突破し、全国の舞台で1勝を掴み取った。

大体大スタイルで掴んだ勝利

男女ともに一貫しているのは、大体大特有のスタイルで勝利を収めてきたことである。男子は高さがない分を、セッターを中心にバリエーション豊富な戦術で得点を重ねるスタイル。女子も高さがないところをパワーでブロックアウトなどを狙うスタイルを築き上げている。平均身長で大きく上回る相手でも勝ってきたのは、一貫したスタイルを貫いているからに違いない。

インカレアベック出場で見えた課題は一つ「全国で通用するスタイル」の確立。関西では上位争いができる状態でも、インカレに行くと女子は日本女子体育大に0―3のストレート負けで初戦敗退。男子は初戦の九州産業大に3―0でストレート勝ちを収めたが、続く2回戦では、明治大に0―3のストレート負けという現実を思い知らされた。しかし、もう一つ上のステージまで程遠いわけではない。成長が楽しみな選手が毎年多く入るし、まとまった良いチームワークを持っている。次なるステージへ今のスタイルに新たな要素が加わった新しい大体大に来年は期待したい。

得点にガッツポーズの選手たち

試合前に円陣を組む選手たち

エースとしてインカレ出場までチームを牽引した諏訪冕大（体育４年）

下級生の時から試合に出続けVリーグ入りを果たした脇田美玲（体育４年）

引退した４年生たち

１年間チーム引っ張った主将の泉裕幸（体育４年）

第29回全日本大学アルティメット選手権大会

昨年に続く好成績! 全国ベスト4!

アルティメット

2018年9月22日～10月7日
ナショナルトレーニングセンターJヴィレッジ他

昨年、日体大を降し日本一に輝いた女子は、今年も順当に勝ち上がり準決勝を迎えた。2年連続の日本一まであと二つとなった法政大学との大一番は、6―7と惜しくも敗戦。3位決定戦に回った大体大は、上智大学と対戦した。5―7と惜敗を喫し、インカレは4位で終わった。男子は本戦トーナメント1回戦で早稲田大に惜敗し、ベスト16で大会を終えた。

復活の大体大アルティ

近年、女子は大学日本一争いに毎回食い込むほど、強かった時代を彷彿とさせるぐらいまで復活してきている。

昨年の日本一もしかり、外部コーチが来てから戦術面での成長が著しく見られている。元々違う競技をやっていたが、身体能力が高い学生が大学に入ってから、アルティメットを始めることが多い大体大は、能力任せの部分が多かった。今は、そこに戦術が当てはまっている状態。これから益々チームとしての成長が楽しみな段階にきている。今回は日本一連覇とはならなかったが、いつかハンドボール部女子のように日本一を何年も連続で取る日は近いうちに来るだろう。

更に今、大体大を巣立ってトップで選手として戦っているOB・OGが指導者になって帰ってくる可能性など、楽しみな要素が盛りだくさんだ。来年は女王奪還に期待したい。

成長が楽しみな賀川実生（体育２年）

２年生ながらインカレの舞台で活躍した中田莉緒（教育２年）

精神面でチームを支えた主将の海野真琴（体育４年）

４年生としてチームを牽引した友光恵（体育４年）

ソフトボール部
◆第30回第50回秋季関西学生ソフトボールリーグ（9月15日～10月27日、四天王寺大学他）
【女子】
▽第1節（1日目）
大体大 2―1 びわスポ大
▽1次予選（2日目）
大体大 0―5 大国大
▽1次予選（3日目）
大体大 2―6 羽国大
▽2次部別（1日目）
大体大 17―2 大教大
▽2次部別（2日目）
大体大 14―0 兵庫教育大
▽2次部別（3日目）
大体大 17―0 京産大
【男子】
▽第1節
大体大 8―7 大阪経済法科大
▽第2節
大体大 12―3 四天王寺大
▽第3節
大体大 18―1 近畿大
▽第4節
大体大 9―6 龍谷大
▽2部決勝
大体大 2―6 大阪大
▽1部・2部入れ替え戦
大体大 0―12 大阪府大
◆文部科学大臣杯第54回全日本大学男子選手権大会（8月31日～9月3日、石川県小松市スカイパークこまつ翼）
▽1回戦
大体大 5―2 福島大
▽2回戦
大体大 1―12 中京学院大
大体大 3―2 天理大
▽2部上位リーグ
大体大 3―2 天理大
▽2部上位リーグ
大体大 2―3 大経大
【女子】
▽第1節
大体大 3―2 滋賀短期大
▽第2節
大体大 1―4 甲南大
▽第3節
大体大 3―2 神戸大
▽2部上位リーグ
大体大 3―2 神戸大
▽2部上位リーグ
大体大 1―4 関西大

ラクロス部
◆第29回関西学生ラクロスリーグ戦（8月11日～17日、鶴見緑地グラウンド他）
▽第1節
大体大 8―4 甲南女子大
▽第2節
大体大 12―6 大市立大
▽第3節
大体大 8―4 神戸女学院大
▽第4節
大体大 6―7 神戸親和女子大
▽第5節
大体大 3―5 園田女子大

剣道部
◆第66回全日本学生剣道優勝大会（10月28日、丸善インテックアリーナ大阪他）
▽1回戦
大体大 3―2 専修大
▽2回戦
大体大 5―3 大東文化大
▽3回戦
大体大 7―3 明治大
▽4回戦
大体大 4―8 筑波大
◆第37回全日本女子学生剣道優勝大会（11月11日、春日井市総合体育館）
▽1回戦
大体大 6―0 島根大
▽2回戦
大体大 3―0 平成国際大
▽3回戦
大体大 1―2 明治大

硬式野球部
◆2018年度阪神大学野球連盟秋季リーグ（9月1日～11月1日、南港中央野球場他）
▽第1節（第1試合）
大体大 2―1 天理大
▽第1節（第2試合）
大体大 7―5 天理大
▽第2節（第1試合）
大体大 6―2 大産大
▽第2節（第2試合）
大体大 4―3 大産大
▽第3節（第1試合）
大体大 3―1 関外大
▽第3節（第2試合）
大体大 3―1 関外大
▽第4節（第1試合）
大体大 3―5 甲南大
▽第4節（第2試合）
大体大 3―2 甲南大
▽第4節（第3試合）
大体大 11―3 甲南大
▽第5節（第1試合）
大体大 2―3 関国大
▽第5節（第2試合）
大体大 7―7 関国大
▽第5節（第3試合）
大体大 2―3 関国大
秋季リーグ準優勝!

軟式野球部
【男子】
◆第35回西日本大学野球選手権大会（11月4日～9日、リプワーク藤崎台球場）
▽2回戦
大体大 2―0 沖縄国際大
▽3回戦
大体大 5―1 熊本県立大
▽準決勝
大体大 2―1 京都文教大
▽決勝
大体大 0―4 岐阜聖徳学園大
西日本インカレ準優勝!
【女子】
◆第32回全日本大学女子野球選手権大会（8月24日～29日、富山県魚津市、桃山球場他）
▽1回戦
大体大 2―1 千葉商科大
▽2回戦
東女体大 5―3 大体大
◆関西地区大学女子軟式野球秋季リーグ（9月30日～11月25日、大阪芸大グラウンド）
甲女大 2―1 大体大
武庫川女大 2―0 大体大
大体大 10―1 大阪芸大
大体大 4―1 関大

女子硬式野球

インカレ3位 優勝チーム相手に善戦!

第8回全国大学女子硬式野球選手権大会

2018年9月11日～10月7日／至学館大学グラウンド他

硬式野球部女子はインカレの予選トーナメントを順当に勝ち上がり、迎えた10月7日に行われた決勝トーナメント。準決勝でのちに優勝を決めた尚美学園大学相手に0―2のロースコアで接戦を見せ、堂々の3位に輝いた。

予選トーナメントは9月11・12日に愛知県の刈谷球場、半田北部球場で行われた。初戦、桃山学院教育大戦では主将の田中亜里沙（体育4年）が初回に適時打を放ち、それがそのまま決勝点となり、1―0で勝利。続く日大国際関係学部戦（以降は日大）では、初回に2点先制すると、六回までは3―2で勝ち越していた。しかし、最終回の日大の攻撃で体大の野手陣のエラーが続き、3―4と逆転負けを喫した。同日行われた3回戦の至学館大戦。勝たなければ決勝トーナメントに進むことはできない状況の中、チームが一丸となり、強い気持ちで試合に臨んだ。大体大のチームの総安打数は8本、五回には安藤聖奈（体育3年）が右翼方向へ適時三塁打を放つなど、安打が多く見られたがなかなか得点につながらず苦戦する。それでも奪った1点を守り抜き1―0で勝利し、決勝トーナメントへと駒を進めた。

新たな歴史切り拓いた女子

約1カ月後に行われた、決勝トーナメントは愛知県の至学館大学のグラウンドで行われた。大体大打線は尚美学園大の田中投手の速球に手も足もでなかった。試合後半、やっとヒットは出たものの打線は繋がらず、三回と五回に1点ずつ得点され、0―2で惜敗。それでも日本一のチーム相手に僅差の試合を繰り広げて得た3位には、一番とはまた違った輝きがあった。

適時打を放った田中（体育４年）とハイタッチする高野（体育４年）

マウンドに集まる監督と野手陣

試合前の円陣

至学大戦で適時三塁打を放った安藤（体育3年）

真剣なまなざしで試合を見つめるベンチの選手たち

女子軟式野球

またもや8強の厚い壁

第32回全日本大学女子野球選手権大会

2018年8月24日～29日、富山県魚津市、桃山球場他

軟式野球の大学女子日本一を決める大会は、合同チームを含めて20チームが出場、優勝旗をかけて真夏の戦いを繰り広げた。

史上初の開幕試合になった大体大は、千葉商科大と対戦、タイブレークの熱戦の末、2―1でサヨナラ勝ちして好スタートを切った。しかし2回戦で前年の準優勝、東京女子体育大に3―5で惜敗、ベスト8は成らなかった。

この大会を最後に退く相馬卓司監督に、大会に功労があった功績を称え「中澤賞」が贈られた。

タイブレークの熱戦制す

初戦の千葉商科大戦は「史上まれにみる熱戦だった」（球審の話）。大体大は杉野未来主将（教育4年）ら、教育学部の4年生を実習で欠き、先発は福井乃々香（体育2年）。初回2死から四球を与えて盗塁を許したが後続を断ち、丁寧な投球で、四回2死二、三塁で適時打されて1点を許し、大型右腕、中村紗恵（教育3年）に託した。中村は直球と縦に割れるカーブを使い分けて相手打線を七回までノーヒットに抑え力投。

千葉商科大の先発・小川芽生（2年）の的を絞らせない投球に苦しんだ大体大は、先制されるとその裏、佐藤希（教育2年）が右翼線にチーム初安打になる二塁打、多久真純（体育3年）が敵失ともに譲らず九回に。中村がしっかり抑え、大体大の攻撃になった。辻本愛（同3年）が、ボールが乱れてきた小川の投球をしっかり見極めてサヨナラの四球を選んだ。

えてして熱戦のピリオドは残酷になることがある。とはいえ、じっくり見極めた辻本を褒めるべきだろう。

力投する中林

昨夏準V、東女体大を攻め切れず

東女体大戦は、教育学部の4年生が合流してチームの意気は上がった。東女体大が三回、エース・杉野を攻めて2点を先制すると、大体大はその裏、四球に足を絡めて1点を返し、東女体大が四回に加点すると、大体大もその裏1点を返す点の奪い合いになった。東女体大が3イニング連続得点となる2点を五回にものした。大体大もその裏反撃、代打・橋詰人志美（教育4年）の右前適時打で1点を返したが及ばなかった。

あと一歩追い切れなかった悔しさ、シード2位の東女体大に冷や汗をかかせながらビッグイニングを作れず敗れたこと―。杉野主将は「4年間で一番熱くなれた夏だった。悔しいの一語だが、充実した時間をくれた仲間に感謝の気持ちで一杯です」と目頭を押さえた。そして後輩たちにメッセージを残した。「技術を向上させることは欠かせないが、全員で戦う意識を大切にして欲しい。一人ひとりが、みんなのことを大切にする思いやりの気持ちを持って野球を楽しんで欲しい」。

熱い夏は終った。

◆◆◆

関西地区大学女子軟式野球秋季リーグは関大が新規加盟、5大学による1回戦総当たりで行われ、大体大は3位に終った。今春のリーグ戦から2回戦総当たりになる。

戦い終えて整列する選手たち

窓

◆◇これまで賞にはほとんど縁がなかった。それがはからずも、栄誉に浴することができた。全日本大学女子野球連盟から「中澤賞」をいただいたのだ◆◇毎年夏、富山県魚津市で開かれる、軟式野球の大学女子日本一をかけた全日本大学女子野球選手権でだった。中澤賞は前の、故・中澤興起理事長を顕彰してできた賞で、大会に功労があった人が対象だ◆◇その年の受賞者はいなかったので、僕が栄えある第1号でもある。創部から監督を12年つとめ、昨夏を最後に退いた。大学も3月一杯で退職、何よりの贈り物をいただいた。長い間ご愛読ありがとうございました。

【相馬卓司】